

飼育下のアジアゾウの子育てに関する観察研究—共同養育にも着目して—

氏名 林凌佑

指導教員 瀧本彩加

ヒトは複雑な社会集団の中で生活を営んでおり、子育ても親のみによって完結することではなく、社会の協力のもとで共同養育が行われている。そうしたヒトの複雑な社会や子育てについて解明するためには、同じ系統に位置する哺乳類の子育てと比較することが必要である。高い社会性を持つとされているゾウ (*Elephantidae*) の子育てについては、追従型に近似した母子間の結びつきが強い子育てや養育を行うことは知られているものの、特にアジアゾウ (*Elephas maximus*) については長期の観察研究がない。またゾウは絶滅危惧種に指定されているため、ゾウを展示する動物園においても繁殖に注力している、繁殖成功率は低い現状がある。5頭のアジアゾウを飼育する札幌市円山動物園も同じくゾウの繁殖に注力しており、準間接飼育や環境エンリッチメントなど先駆的な取り組みを行っている。したがって、そうした円山動物園のゾウを観察することは、繁殖成功率向上のための有用事例を記録することとなり、飼育下におけるアジアゾウの共同養育についても明らかにすることとなる。そこで、本研究では円山動物園のアジアゾウ母子を対象に1年間の行動観察を行い、生後1年間の母子関係の特徴とその推移と、同じ群れの中の非血縁の若メスがどのように子育てに関わるかを検討した。母子の近接率や距離、授乳行動について記述統計をしたところ、母子は近接していることが多く、授乳拒否率も低い、母子間距離は経時的に増加していくという母子関係の特徴がわかった。また、若メスの同居が母子間の近接率または親和的なやりとりの平均回数に及ぼす影響を調べたところ、母子間の親和的なやりとりへの影響が見られ、母子のみの同居時より若メスを含む3頭同居時の方が、親和的なやりとりの平均回数が有意に少なかった。加えて、3頭同居時においては、子は母に対してよりも若メスに対して接近や親和的なやりとりをすることが有意に多かった。したがって、飼育下のアジアゾウにおいても非血縁メスによる共同養育が行われているといえる。ただし、本研究は子の生後1年間のみのデータを用いた分析となっているため、アジアゾウの子育てについて明らかにするには、子の離乳までのデータを収集し分析することが望ましい。そうすることで、ゾウの繁殖率向上やゾウの社会性についての解明につながるだろう。